

# 猫蓑通信

第 97号

平成 26年  
(2014年)

10月 15日発行  
(年 4回発行)



## 恋句について

青木秀樹

秋灯恋さまさまの七部集

明雅

この句は『猫蓑庵発句集』所収の東明雅先生の発句です。芭蕉の時代にもさまさまの恋句があるなあと詠嘆の句です。和歌、連歌、俳諧の連歌、現代連句と続く日本の詩歌において、恋は主要なテーマとして詠み続けられてきました。連歌の時代から恋句のない作品は「はした物」とされ、いまでも恋句は連句の花とされています。往々にして恋句は一卷の山場をなし、作品の良し悪しを決定づける要因になります。

古今集、新古今集は恋の歌が主流を占め、現代に伝えられている藤原定家選定の小倉百人一首の四割近くは恋がテーマの和歌です。連歌の最高傑作とされる宗祇・宗長・肖柏による「水無瀬三吟」には六ヶ所に恋句の応酬があります。時代が下がって、松永貞徳の連歌・俳諧では詞の縁で付合う物付(詞付)が奨励されましたが、この貞門の指導書の一つ『毛吹草』では「俳諧恋の詞」と「連歌恋の詞」が決められており、その詞を用いさえすれば恋句になるとされています。

ました。このように定式化されたものには発展性がなく、西山宗因の談林派の台頭により衰退しました。芭蕉の時代については東明雅先生の著作『芭蕉の恋句』(岩波新書・特装版もあり)があります。この著作は芭蕉の恋句のすばらしさを論評するだけでなく、恋句を通して俳諧文芸の付合のおもしろさを伝える連句入門書にもなっています。

明雅先生は現代連句の恋句の風潮を嘆いておられました。連句は俳諧であるから優雅、優美でなくてもよいが、恋句は恋の心を詠むものであって、性的な行為、行動などを直接詠むものではないとくり返し説かれていました。

ここで話は飛びますが、日本連句協会公報「連句」で、募吟「短歌行」により付合指導を連載している東條士郎氏の講評の中に恋の句を具体化する手順について記述があるので紹介します。(通巻第198号)

A 時間的に(きっかけ↓なれそめ↓進展↓高揚↓燃焼↓余韻↓別離↓思ひ出)

B 心情的に(ほのか・ときめき・恍惚・恋情・狂恋・嫉妬・心残り・惚ぶ)

C 主体は(自分自身・相手・他人・物語など的人物)

## ●目次

第三十回猫蓑会例会作品 歌仙八巻…………… 2

第二十四回猫蓑同人会作品  
歌仙八巻のうち後半四巻…………… 6

柏連句会あれこれ…………… 武井雅子 8

恋句の作り方面白い方(上)…………… 東 明雅 10

連句はタンゴ…………… 近藤蕉肝 12

アルゼンチン連句紀行…………… 事務局たより 16

D 状況は E 場所は F 時刻は  
と押さえます。表現としては観念として出すか直接描写するか、間接的に想像させるか、それとも他に仮託するか、また、ヴァリエーションとしてそれらをさまざまに組み合わせるのか、可能性はさまざまです。(以上転載)  
連句そのもののおもしろさは古今東西どこでも行け、時間的制約も地理的な制約も乗り越えて想像をめぐらすことができることです。しばしば恋句は苦手だという人がありますが、自分自身の経験の中だけでなく、想像の羽を伸ばせばさまざま恋句が生まれるでしょう。現在、私たちは芭蕉の時代とは違う大きな世界、多くの情報の中で暮らしています。自由な発想で現代的な恋句に挑戦しようではありませんか。

避暑の座

歌仙「夏の川」

矢崎 藍 捌

川を渡り夏の川を渡り芭蕉庵

茉莉花の鉢並ぶ路地裏

鼓笛隊強化練習励むらん

帽子の横に付けるゆるキヤラ

おもたせの饅頭よろし月今宵

厨の土間につづれさせさせ

ウ 面打ちの鑿を研ぎ居る秋寂びて

こころやさしき修禅寺の殿

キヤリアーの女課長に逆へず

エレベーターは恋の蜜壺

うつふんとははんで噂広がつて

大地溝帯今は鎮もる

民族の自決は難し月冴ゆる

児ら手伝はせふさぐ北窓

單車駆り海沿ひの道風任せ

郵便ポスト兼ねるコンビニ

すすめられ電子たばこを花の陰

見えない黄砂降つてゐるらし

ナオ 玄関に杖と草鞋と遍路笠

腰の瓢の鳴りて軽ろがる

十三の歳に覚えた酒の味

性善説にひとしきり沸く

ほうたるは水のあまさはかりかね

泉 奈 石 奈 夫 奈 石 泉

ナウ 里山にしめぢ舞茸鼠茸

よそのながら地藏堂守る

自治会長紵余曲折で選ばれて

ひ孫相手にキャッチボールを

クオヴァデイス花びら空を覆ふごと

しばし夕陽のにじむ弥生野

連衆 青木泉水 鈴木美奈子 林 転石

國司正夫

初めての夜の汗しとどなる

手鍋提げあなたを追つて巴里まで

パントマイムでありし人生

どう開ける寄木細工のこの函を

羽づくろひする寝ぼけ鶺鴒

月明はショパンのピアノコンツェルト

オーブンカフエに紅葉かつ散る

ナウ

よそのながら地藏堂守る

自治会長紵余曲折で選ばれて

ひ孫相手にキャッチボールを

クオヴァデイス花びら空を覆ふごと

しばし夕陽のにじむ弥生野

外寝の座

歌仙「鉢植を」

鈴木了齋 捌

鉢植をマリーと名付けパリー祭

光の帯となるるグッピー

今日もまた新式風呂屋賑はひて

続く鼻唄気持ちよささう

昇進の宴帰りの角の月

忘れ団扇がまたこちらにも

地芝居を待ちかねてをり村の衆

向かひの席の眼鏡ティファニー

休日 of 慈善事業をなれそめに

齋 太 全 良 太郎 碧 富

永久に終はらぬ音楽と恋

菩提樹は大きな枝を揺らしつつ

漂ふ如き瞑想のなか

狐火を存在論で解いてみや

何か出さうな冬の織月

轆轤引く青年工の後姿に

ポストの中の海へ手紙を

君想へば地の花もみな天の花

馬にゆられて嫁ぐ永日

ナオ 軟東風にみどりこの頬くすぐられ

連絡船のテープ千切れる

キンドルに入れ消閑の文庫本

夢といふ字の画数を問ひ

開かずの間開けてみやうと提案す

好奇心強すぎる若妻

新絹はたとへば汝のふくらはず

鈴虫の鳴く漆黒の間

月光に旗ひるがへる山の上

いま反乱の烽火揚げなん

たはむれに戦はずまじ総理殿

蒸饅頭の苞が熱すぎ

ナウ 除雪車を隣町から借りてくる

氷壁登るCMは嘘

仮設にてテレビを友に老いんとす

鸚鵡と語るこれからのこと

花吹雪別れ別れてきりもなし

小さく見ゆる耕しの人

連衆 本屋良子 名古屋富子 松本 碧

功刀太郎

富 碧 太 良 富 良 全 良 碧 良 太 齋 全 良 碧 太 良 富 全 太 良 碧 富

登山の座

歌仙「旅寝の夢」

近藤蕉肝

捌

ここもまた旅寝の夢や夏の霜

蕉肝

草蜚蟻のゆらゆらと舞ふ

鄭和

白緋白いシャツボも誂へて

未悠

子はいつの間に我が背丈超え

蓉子

評判の新刊本が平積み

敦子

潮吹く鯨同時中継

敦

ウ 畏まり歌会始初参加

悠

携帯電話何処にでも来る

敦

ヒマラヤの嶺で告白アイラブユー

和

なり余りたる身こそおろおろ

全

期待する拉致被害者の胸の内

敦

今日も通へる角の猫カフェ

蓉

十六夜のバックガモンを楽しみて

悠

新酒片手につまむ橄欖

敦

雁の海峡こえる頃ならむ

蓉

話の続き孫にせがまれ

敦

富岡の世界遺産は花の中

悠

静かに蠅の生まれぬる溝

蓉

ナオ DNA実験かさね鐘かすむ

悠

ジャンヌダルクが聞く神の声

蓉

テント小屋お代は見てのお帰りに

和

刺し子で作る婆の雑巾

敦

鱗雲無人の郷のはるけくて

蓉

豊饒の潮照り渡る月

敦

文化の日ピラティス体操力込め

悠

ニューハーフでも拒否はしません

和

そつと背で受け取つてゐる海苔弁当

蓉

知らぬふりする疵の大きく

和

密教を陰日向なく守るらん

敦

記憶の枯野歩く老人

蓉

ナウ ミサイルの北から繁き寒見舞

和

時には変はるドンの髪型

悠

複雑な廁の釘押し違へ

敦

雛の客はよくしゃべる娘ら

悠

花深き処に泪歌もあり

肝

磯の遊の残す筆あと

蓉

連衆 高山鄭和 棚町未悠 五味蓉子

武井敦子

納涼の座

歌仙「夏深し」

武井雅子

捌

夏深し独り瞑る翁像

雅子

蟾の聴き入る庵の水音

文子

新刊書インクの匂ひ楽しみて

郁子

こだはりの豆たてるコーヒー

徹心

月の道単車で駆ける若き技師

酔山

追はるる如く野分雲行く

心

ウ 美術展絵巻物観る六本木

文

隣の彼のなんとクールな

郁

この世では僕のマドンナあなただけ

文

宇宙旅行も夢でなくなる

山

おもてなし今や万国共通語

心

尺八で吹く粋なシャンソン

全

凍つる村診療所には研修医

山

大き寒月中天に浮く

郁

菰樽をあけて本音の良き仲間

全

ピッチャーキャッチャーずっと続ける

山

花万葉歴史年号暗記して

心

鯛網揚げて帰る豊漁

山

ナオ 空めざし上がれ上がれよ初雲雀

文

出番の役者スマホ離さず

全

飛び乗つた車両は女性専用車

心

蝮注意と秘湯ならでは

文

評判の鰻料理を供されて

郁

出雲の禰宜に慶事次々

山

長椅子へ誘ふセリフをシミュレーション

心

待つてゐるのよもの言はぬ腕

文

横綱は一番で大技を

山

外国人のたむろする角

郁

共に師を偲ぶ窓辺に仰ぐ月

文

秋の螢の舞の悠々

山

ナウ 結界の橋渡るとき涼新た

文

教授の髭も白きもの増え

山

一年生あと一息の逆上がり

郁

愛犬散歩時間通りに

全

手びさしに余る吉野の花の山

山

菜飯の茶屋の軽き挨拶

雅

連衆 橘文子 東郁子 佐藤徹心

吉田酔山

平成二十六年七月十六日  
於 江東区芭蕉記念館

水泳の座

歌仙「颯颯と」 松島アンス 捌

裾捌く音颯颯と上布かな アンス

橋くぐりゆく納涼の舟 忠史

教室にいたづらつ児の残されて 淳子

黒板消しはまつすぐに拭き 恭子

観月会ライトアップを設へる 昭

柚子味噌を塗る田舎蒟蒻 淳

ウ 小牡鹿の声は何かの合図かと 恭

携帯電話お揃ひの柄 史

おそれもなく縦長の臍を出し 昭

どこまで進む妄想の恋 恭

脱法の品危ふきに近寄らず 淳

スポーツジムの人気者なり 史

ストープの炎揺れてる月の夜 恭

単線列車鶴の来る里 史

佇むは豪族抛りし十三湊 昭

円ドル相場興味しんしん 史

天を突く花も枝垂るる花もあり 全

もつともつととせがむふらここ 淳

ナオ 姉の出る都踊の幕が開く 恭

水のかはりにちよつと飲む酒 全

写経する筆の穂先を確かめて 昭

毛並みつやつや雄の三毛猫 淳

吾が町に黒き翼の軍用機 史

タワー仰げば夏の雲湧く 淳

ほうたるに邪魔されさうな長いキス 恭

大社の宮司良縁の報 史

あいまいな世界遺産の松の数 全

そこも此処もと夢のまた夢 淳

宅急便いざよふ月とともに来る 全

茸博士が太鼓判押し 昭

ナウ 秋祭今年は山車を曳く番に 恭

名も残らない合併の村 昭

訪へば野太き声の応と出て 淳

介護は要らぬ婆のがんばり 恭

御薬園古木を濡らす花の雨 ア

匂ひゆかしき故郷の土 執筆

連衆 根津忠史 上月淳子 式田恭子 昭

松原昭

水遊の座

歌仙「ありがたや」 内田遊民 捌

ありがたや六千日さま浅草寺 遊民

父子お揃ひ甚平の柄 久美子

画架立つる屋根裏部屋に住むならん 常義

国費留学切れて久しき 霞

灯を消して心行くまで浴びる月 照子

新豆腐には薬味たつぷり 久

ウ オートバイコスモス街道まつしぐら 霞

駅伝部員女性急増 義

連弾で指のふれあひほのぼのと 照

カウチに寄りてモデル微笑む 霞

珈琲に砂糖幾つにしやうかな 久

鱗粉舞ふかに凍て月の影 義

へそくりは無事にそのまま年を越す 久

そぞろ神様またも取り付く 全

ローカル線半睡の夢すぐに消え 霞

小川の水はさらさらとゆき 義

紺碧の空に遊べる花の帯 久

耳を澄ませば鳥交るこゑ 照

ナオ 山笑ふ茶屋の亭主の腕まくり 霞

偶には来るぜテレビ取材も 義

だからと集団的自衛権いつまでも 久

歯にくつつきて安倍川の餅 義

爺爺じいじの仕方噺はノリノリで 照

反り凄艶に名女形なり 全

握る手の汗ばみ恋の季節来る 義

避暑地の情事期間限定 霞

いつしかに母の遺産の減りてゆく 義

飽きることなく鳩に餌やり 久

少年の想ひ宇宙へ月の舟 霞

秋の潮のふくらんでくる 久

ナウ 故郷は醸す葡萄の香に満ちて 義

分教場に響く歌声 照

シルバーパス使ひこなして留守ばかり 久

江ノ電に乗り街をすり抜け 照

花吹雪献茶の膝に迄届く 民

仔猫の仕種ほんに愛らし 照

連衆 副島久美子 生田日常義 高塚霞 田所照子

舟遊の座

歌仙「タイムスリップ」 佐々木有子 捌

あの頃へタイムスリップ心太 有子

軒端をよぎる大き夏蝶 秀樹

四重奏梁の埃をふるはせて 文伸

つい見逃した角の矢印 ひろみ

入り組んだ鉄路乗り継ぐ月の下 俊子

色なき風の吹き飛ばす帽 曜子

大相撲出世力士の背叩く み

泣く子が勝ちに泣かぬ嬰兒 俊

ゆつくりと鳴くまで待たう恋のみち 樹

未だ判らぬ妻の本性 伸

神楽坂しのび逢ふにはよき酒場 樹

投扇興の講座開かれ 有

福寿草飾れば月も笑むならん 曜

善男善女励むりハビリ 伸

捨て犬は麻葉探知の名犬に 俊

見廻り隊のけふも巡回 樹

円墳の丘に登れば花の雲 伸

五センチほどに育つ苗代 み

ナオ プランコを漕ぐ長男のたくましく 俊

目にも眩しき金の延べ棒 曜

温泉の出で驚きの大手町 全

水路辿りて古地図確かめ み

ハネムーン Gondola の歌聞きながら 伸

平成二十六年七月十六日  
於 江東区芭蕉記念館

婚外婚もお国柄なり

異母兄弟みな同じ年同じ顔

大好きなのよ茄子もトマトも

宅配の集中制御コンベヤー

会ふは別れの始めなりとは

異境にて学位間近をはやす月

菊の宴には比丘尼招かん

ナウ 降る如く河鹿の声はリリリンと

鉦山跡へバイク走らす

弁当はまん丸にぎりふたつきり

冷めたるお茶に残る茶柱

一生を花に捧げて花の画家

雉子の親子に出会ふ森陰

俊 有 樹 曜 伸 み 俊 全 樹 み 伸 樹

連衆 青木秀樹 若林文伸 江津ひろみ

三木俊子 前田曜子

波乗の座

歌仙「翁惚ぶ」

由井健 捌

翁惚ぶ色紙掛軸曝書かな 健

南風そよそよと過る縁先 路子

呼び鈴と電話も鳴りて賑やかに 弘子

迎へに来たる登校の友 志世子

有明の引つかり居る杉木立 宏通

蓑を背負ひて揺るる蓑虫 路

鎌祝一族そろひ盃をあげ 弘

そつと忍んでボストのぞく娘 世

黒眼鏡秘密を隠し果せずに 通

入籍なしで双子出産

少年の夢のふくらむきのふけふ

般若心経唱へひたすら

寒月に先導される救急車

残業終へて底冷の街

国会の野次の応酬低次元

侮り難し女性パワーは

肩組みて花の盛りを謳歌せむ

空に届けとふらここを漕ぐ

ナオ 夜明け待ち巣立つ小鳥にはや目覚

とんとんとんと刻む油揚

エスコートキッズに孫の選ばれて

ブラジル仕込みサンバお土産

汗だくで改修工事足場組む

夏山登山腰に携帯

喜寿にして恋に朽ちなん同窓会

好きでしたのよ幼稚園から

鍵付きの手帳に秘密閉ちこめる

煙草離せぬ康成の癖

水に浮く月を砕きて巨船ゆく

長き夜徹し映画三昧

ナウ 飛石を伝ふ離宮の松手入

茶会の席へ案内の文 世

蔵の奥形見の着物搜しみて 弘

二十八宿吉を選びぬ 路

メルヘンの世界に舞ひて花の精 健

猫の欠伸のいともうららか 世

連衆 倉本路子 松原弘子 秋山志世子  
菅原宏通

まゆはきをの座

歌仙「遠雷に」

青木泉水 捌

遠雷に呼応するかやこころの火 泉水  
肩にしとどと紫陽花の露 蓉子  
海めざしスピードボート奔るらん 常義  
木つ端の匂ふ新築の家 節子  
ささやかに昇進祝ふ月の宴 美奈子  
自ら捌く鱸三尺 義  
ウ そぞろ寒八犬伝に読み耽り 蓉  
窓の木靴のこびと飛び出す 節  
髪ほどき指にやさしくからませて 奈  
嫁の力で家業継続 義  
セーターのワンピースはゆるキャラに 節  
にやりと笑ふ凍月もあり 義  
定年後めがねに付きし曇り癖 節  
角を曲がれば素のままとなる 奈  
レクイエム鼻唄にして歌ふヤツ 義  
送迎バスを待つてゐる列 節  
花燦々一村すべて同じ姓 全  
名代草餅味はそれぞれ 蓉  
ナオ 父と子の臘の夜の語らひに 義  
出土の土器にいろはうた見ゆ 節  
小箒で窓を払へば山があり 泉  
野末を遠く馬のほこぼこ 奈  
駅ベンチぽつんと籠の青林檎 義

たばこ貫つて政談に乗る 泉  
見るべきは見つと右眼に葉差し 蓉  
凧なれど落ちぬ鳶の葉 義  
かき抱き交叉激しき舞踏靴 奈  
予定調和で幕間となり 泉  
クリムトの女に月の影射して 蓉  
竜田の姫と夢の曼茶羅 奈  
ナウ 秋冷の王家の墓に額づける 節  
秘宝はただの石ころと知り 義  
剣菱をうるめ肴に五十年 奈  
いつの間にかやら巢立ちゆく鳥 蓉  
花仰ぎ耳に遺れる妣の声 泉  
旅のプランを選ぼうららか 執筆

連衆 五味蓉子 生田目常義 長坂節子  
鈴木美奈子

閑さやの座  
歌仙「初蛩」

松原弘子 捌

物語の始まる予感初蛩 弘子  
清水湧き出る竹藪の奥 孝子  
競技場サムライブルーに染まりゐて 路子  
ラジコン性能兄と競へる 明子  
卓袱台をたたむ窓から丸い月 転石  
楽屋囁も笑ふうそ寒 孝  
鎌祝まつとつときの酒を出し 明  
君は楽しむパートタイマー 孝  
バツ一を隠して彼にのめりこみ 路

俺の手管で金づるにする 石  
この国に怪しく燃ゆる改憲論 孝  
片頬笑ひさうな銅像 石  
鱈漁の網曳く船を傾けて 孝  
唄ひあげたる沖の寒月 路  
世界へのグルメツァーは大盛況 明  
個人情報こつそりと盗る 石  
菩提寺の葺葺き終ふ花の奥 孝  
でんぐり返り遊ぶ猫の仔 明  
ナオ うららかに独り暮らしも乙なもの 孝  
自称北斎ちびた筆なめ 石  
髪の前髪は朝のジョギング 路  
検診前は朝のジョギング 明  
汗かいて招き寄せたる五つの輪 路  
水着を着ても化粧厚塗り 明  
後添の夢にはひそと鬼が棲む 孝  
妄想を断つ一刀の下 弘  
盤上に那智黒を打つ音のよき 石  
星流れたり朱雀青竜 路  
月昇るステンドグラスにある涙 明

ナウ 三線の島の苦瓜塩で揉む 全  
器用に使ふ指の短き 石  
徘徊の人に注意と回覧板 明  
幼な児飽きず吹戻し吹く 路  
花万朶北アルプスを借景に 弘  
鉄砲狭間に覗く春色 路  
連衆 坂本孝子 倉本路子 野口明子  
林 転石

さみだれをの座  
歌仙「父の日や」

武井敦子 捌

父の日や湯呑茶碗の益子焼  
窓辺を飾るあぢさゐの藍  
お揃ひの麦稈帽をかぶりぬて  
ホップステップジャンプしてをり  
背を丸め月に向つて吠える犬  
類にやはらか秋の初風  
朋友をもつてのほかでもてなさん  
酔ひにまかせて本音ほろりと  
恋文の数を競つた変な奴  
あとはさつぱり知らんぷりする  
強引に税の引き上げ通したり  
プログラマーの仕事次々  
寒月に腰痛体操一二三  
凍鶴の影すこし身じろぐ  
大声をあげて声明若き僧  
挽きたてコーヒーコンビニで買ふ  
来年もあると思ふよ花の下  
浅瀬は桶に潮を吹きたる  
ナオ 故郷の母つつがなく山笑ふ  
連れてゆきたいドログバの邑  
サッカーのテレビ放送きりもなし  
身ぶりの派手な禿げた落語家  
お宝の鉄瓶撫でて艶を愛づ

敦子 雅子 ふみ 良子 醉山 志世子 良 雅 世 全 醉 良 雅 醉 雅 良 全 醉 世 良 雅 雅

平成二十六年六月十五日  
新宿ワシントンホテル 新館

年の差婚の嘆く短夜

いとこら蚤のあかり君と僕

戦場に行くことになるかも

人類も絶滅危惧の種のひとつ

黄色い声の応援の波

華甲過ぎバイクを駆つて月を追ふ

酒酌み交す新蕎麦の店

ナウ立身の夢結ばむと藁塚の陰

岩波文庫いつも鞆に

鉛筆の削り方にもこだはりを

さよなら言つて児等は散りぢり

ニュータウンメインロードの花吹雪

飛行機雲の行く弥生空

連衆 武井雅子 中村ふみ 本屋良子

吉田醉山 秋山志世子

野を横にの座

歌仙「梅漬けて」

市野沢弘子 捌

梅漬けて少し未来を信じたり  
夏の燕の飛びきたる軒  
自転車のベル鳴らしつつ過るらん  
回覧板にボールペン添へ  
月の出を待ちかねてある踊衆  
新豆腐ありと知らず貼り紙  
大津絵を旅の土産にそぞろ寒  
鬼と呼ばれる部長もててもて  
しのび逢ふ肉食系と草食系

弘子 郁子 久美子 アンズ 遊民 富子 久 富 久 ア 久

おしやれかつらが板についてる

リニユール大型ロボット好評に

虎の門ヒルズボクトラノモン

裏山を見上ぐる方の寒の月

着ぶくれの中嘘を潜ませ

魔除けなる水晶の玉手ばなさず

雀のこない庭は淋しい

スーパーセーブスーパーゴール花吹雪

しやぼんだま吹き楽しめる子等

ナオ 伊勢参東司はすべて豊敷き

赤福もちでお酒飲む癖

沖よりの船は大漁旗を立て

絶滅危惧種となるウナギは

同窓会名簿にハートマークつき

何ちやんだつけ初恋のひとつ

徘徊の果てに女房の腕の中

外は震よ見続ける夢

隣よりたくみな琴の響きくる

猫のひとつみはまん丸になり

三方に月のお供へこんもりと

すすきでなでるお地蔵の帽

ナウ 音訳も点字もこなすさはやかに

日給時給それが問題

こだはりの印の並ぶ道の駅

放課後野球賑やかな原

花燦々川の流れにひろがりて

春のショールと胸のイニシャル

連衆 東 郁子 副島久美子 松島アンズ  
内田遊民 名古屋富子

## 柏連句会あれこれ

武井雅子



平成二十六年七月十三日（日曜日）、柏連句会はお世話役の久保田庸子様のご発案で七月生まれ二人の誕生会を開いた。誕生祝連句会というのは初めてである。十三日当日が誕生日の貝母亭清子宗匠と、二十八日生まれの東郁子（私の母）、それぞれ九十一歳、九十四歳、柏連句会創成期からのメンバーである。当時は六十歳前後、改めて柏連句会の歴史の長さを思いやったことであつた。出席はベテランの梅田利子様、久保田庸子様、吉藤とり子様、飯塚國光様、山中土筆様、そして若き中国人留學生の孫潔さんと私の計九人。

冒頭、思いがけないことに清子宗匠から母に

七月の郁子の太蔓称ふる日 清子

という、達筆の誠に有り難い短冊が贈られた。「太蔓」というには全くそぐわない母は、先日の検診でも体重三十キロを二百グラムほど切る細身になってしまったが、この三十余年柏連句会はほぼ欠かすことなく、父（東明雅）亡き後も柏連句会には必ず行かなければと出席して来

た。「太蔓」として下さったのが私には大変感激であつた。その後庸子様が用意して下さつたお心づくしのお祝いの品が披露され、和やかな食事へと。清子様が、父、母、秋元正江様と各地の花の名所を訪ねた旅の思い出を語つて下さつた。月山の宿では「お先にどうぞ」と言われて風呂に行った父が、湯のあまりの熱さに入ることが出来ず、情けなさそうに早々に戻つてきたそうだ。とつくに時効と思うが、大変申し訳なかつた。

その後二卓に分かれ、二十韻二巻を興行。これからの健康を願つて和やかに会が終つた。

### 「郁子の太蔓」の巻

七月の郁子の太蔓称ふる日 清子  
祝ひ祝はれ冷房の部屋 郁子  
新開地プラスバンドの響くらん 國光  
電気自動車充電に寄る 土筆  
ウ 朋友と共に玉兔に暮す夢 孫潔

### 「二人の媪」の巻

夏座敷媪二人の笑み給ふ 雅子  
白百合清ら香り馥郁 とり子  
バス旅行遙かなる峰連なりて 利子  
源流潺々こくこくと飲む 庸子

柏連句会は、父が松本から柏に転居した昭和五十五年末より自宅で開いていた連句会が元になつてゐる。そこに同じ芦丈門の都心連句の方が加わつて捌をされるようになり、葛飾連句会

と称していたが、昭和五十七年に柏連句会と名称を変えて現在に至つてゐる。

父の存命中は会場の柏市光ヶ丘近隣センター二階の和室に三卓も四卓も囲んでいた時期もあつたが、父亡き後、参会者は減り続け、高齢化が進み、しばらくは四人（清子、郁子、庸子、雅子）で辛うじて続けていた。現在は連句歴七年の國光様に加わり、利子様、とり子様もどつて来られ、清子様と同じ町内、同じ二丁目に住みながら柏連句会の存在を知らず長年実作の場をさがしておられたという土筆様に加わり、時々松島アンズ様が見えて椅子に座るなり句を付けられる。

例会は毎月第二日曜日、十二時から六時まで。時間がたつぷりあるので、国民文化祭など応募作品を作るとき以外はじっくり歌仙を巻いている。清子宗匠の、的確ときには厳しいご指導で膝送り。付けの合間にはいろいろな話で盛り上がる。旅仲間とあちこちに旅行される庸子様は珍しいお菓子を用意して下さるので、それも楽しみにのひとつである。

この四月、麗澤大学の日本語専攻の留學生、中国遼寧省本溪市出身の孫潔さん（二十七歳）から電話があつた。「連句会に参加したいのですが」俳句とともに連句にも興味を持った留學生に驚き嬉しかつた。早速五月の例会には出席。「連句の上達はとにかく座に加わること、見学はないのです。」「はい、わかりました。」とすぐ連衆に加わつて、清子宗匠に逐一、説明指導を受け、連衆に助けられて半歌仙膝送り四句





七月例会での二人誕生会。前列左から二人目が貝母亭清子宗匠九十一歳、三人目が東郁子九十四歳、右端筆者

付け、二巻を巻き上げた。素晴らしいことと思う。将来帰国され中国でも連句を広めて下さればと大きな期待をしている。  
一つの卓を囲んで、九十代から二十代まで、男女の差なく、バックグラウンド、国籍までも違う人たちが、この付けと転じの文学作品を作り上げるとはなんと素晴らしいことか。小短冊

に向かつて頭をひねるこの数時間が、とても幸福な貴重な時間に思える。

今年は新しい方の参加があり、また国民文化祭応募作品を作るため、二十韻や半歌仙の作品を多く巻いた。掲載の歌仙は、年頭一月十二日首尾のものである。

最近猫蓑会オフィシャルサイトの実作の場紹介ページに、柏連句会も加えていただいた。ネットを見て参加して下さる方が増えることも願っている。光ヶ丘近隣センターでの例会が原則であるが、椅子席確保のため場所を変えることもあるので、事前に場所を確かめていただければと思う。

柏連句会例会作品  
歌仙「六日かな」

下鉢清子 捌

鉛筆をみんな尖らせ六日かな  
初声を聞く校庭の隅  
弥生山重なり合うて招くらん  
芹青々と小流れに揺れ  
籬遊び月も窓より覗きをり  
類杖突けば寄つてくる猫  
長男も長女も家においで  
ワインこぼしてそれがきつかけ  
蚤の市愛の欠片が散らばつて  
唐三彩を買つて神棚  
釣堀に座り続けて釣果なく  
ラヴェルのボレロけふの演目

清子 雅子 庸子 アンズ 利子 清子 雅子 庸子 ア 利子 清 雅

月を浴び留守の子どもに渡すチョコ  
展望車から秋独り占め

おくんちの庭に還暦祝はれて  
算盤教室老の一徹  
少年の夢は宇宙へ花万朶  
春の雨降り香る野おもて

ナオ志摩の海真珠筏ののどらかに  
知らない顔の増えた故郷  
北斎の天井画見る寝ころんで  
麗峰富士は永久にたをやか  
雪おろし頼み学生アルバイト  
鍋焼うどんに入れる丸餅  
混り合ふ英語独逸語恋もつれ  
マヌカンなべて流し目をして  
口癖の南無阿弥陀仏繰り返す  
納戸に隠す妖怪の像

二合半の酒の雫に映る月  
弟子の三役賭けし秋場所  
ナウ先生に教へて貰ひ茸狩り  
忘れた頃にやつてくる地震  
突然の知事選出馬宣へる  
町内情報ラジオ体操  
花を友大黒柱無き家に  
北窓開き入るる川風

連衆 武井雅子 久保田庸子 松島アンズ  
梅田利子  
平成二十六年一月十二日 首尾  
於 柏市光ヶ丘近隣センター

庸 清 ア 庸 雅 清 利 ア 庸 雅 清 利 ア 庸 雅 清 利 ア 庸 雅 清 利 ア 庸

恋句の作り方味わい方(上)  
東明雅

『季刊連句』第三五号  
平成三年(一九九一)十二月一日発行  
より転載

一 連句の本質としての恋句

連句の歴史を遡って行くと、歌垣(かがひ)というものに到達するというのが、学会の定説である。

歌垣は古代、春・秋、気候のよい時、若い男女が山野に集まって、互に歌を詠みかわし、舞踏して遊んだもので、常陸風土記にある筑波山の嬬歌など、最も有名である。

もともと、筑波山は伊邪那岐命を祀る男体山、伊邪那美命を祀る女体山から成り、関東から遠望して向って右が女体山、左が男体山で、この男体山の南下に連歌岳があり、日本武尊と火焼の翁の間に交わされた、

新治、筑波を過ぎて幾夜か寝つる  
かがなべて夜には九夜日には十日を

の応答が、連歌の始まりと言われ、以来、連歌を「つくばの道」というようになった。

さて、この筑波山にある和合の神、縁結びの

神である筑波神社の後ろに、「嬬歌」の地が今も残っていて、古代の佛をしのぼせるものがある。

常陸風土記によれば、嬬歌の夜、男から妻どのの印を貰わぬ娘は、女の中に入れないと書かれています。嬬歌の夜は一種の集団見合、集団結婚の夜だったのである。

ところで、この嬬歌における男女の歌のかけ合いは、言語(歌)に霊力を認める、いわゆる言霊の思想がその背景にあった。相手から歌を言いかけられた場合、それに答えられなかったり、答えてもうまく答えられなかった場合には、その相手に従わなければならなかった。それで男女ともに、全身の智力・気力で、即興に相手に唱和し、相手を屈服させることが必要であった。たとえばおのころ島で天の御柱をめぐって行なわれた、伊邪那美・伊邪那岐二神の唱和、

あなにやしえをとこを  
(ほんにまあよい男よ)  
あなにやしえをとめを  
(ほんにまあよい女よ)

などは、その典型的なもので、この唱和は5・7・7・5・7・7の片歌の型式をもっている日本武尊と火焼翁の唱和よりも形が古いから、これこそ連歌の祖であるという説もうなずかれ、また、恋の句が連歌の根元であり、中核であるということも、納得されるであろう。

後に連歌の形式が定まり、百韻の式目が定め

られた時、二条良基(二四二〇～一四八八)が、

春 秋 恋 已上五句

恋の句只一句にて止む事無念

と定めたのは、春・秋にやらんで、恋を最も重視する思想のあらわれであり、恋句を一句で捨てず、必ず二句以上詠むというのは、例の歌垣において、恋句を詠みかけられた場合合には、必ずこれに答えねばならないと言霊の信仰が、良基の時代にも残存していたことを示すものであり、この伝統は言霊の思想が忘れられた今日までも、重要な式目の一つとして現代連句の中にも残っているのである。

元来、連句はその題材として、天地万物・森羅万象のすべてを詠みこむわけであるが、花鳥風月の自然の描写より、人間の存在・人間の関係、そして人情の機微を詠うところにおもしろみがあり、重点が置かれている。

恋はその人情の中で最も深刻であり、かつ華やかであり、また興味のあるものであるから、連句一卷の中でも、中心となり、いわゆるヤマ場を作ることが多い。連句の一座においても、表六句が終って裏に入り、そろそろ恋句が出るかゝる処になると、連衆の気持が頓に昂揚して、出勝の席ならば皆が争って出句し、一座は急に盛り上がってくる。このような経験を持たれた方は多いだろうが、これも連句の祖である歌垣の昂奮の名残が、我々の血の中に残っているからに外ならない。去来抄に「恋の呼び出しの句

が出されると、相手は恋をしかけられましたと挨拶して、恋の句を出すことになっていった」というが、これも、はっきりと連句の恋の句、そして連句そのものが、歌垣の伝統の上に立っているという証拠である。

## 二 お手本としての芭蕉の恋句

芭蕉の恋句は、現在残っているものだけでも四〇〇前後あるが、それら芭蕉の恋句の性格を最もよくあらわした付合がある。

さまざまに品かはりたる恋をして

凡兆

芭蕉

これは元禄三年（一六九〇）に作られ、「猿蓑」の中にも収められた「市中は」の巻に出ている有名なものである。この付合が芭蕉の恋句の性格を見事に表現している。

それは、まず第一に、芭蕉の恋句は、すべて、「さまざまに品かはりたる恋」を述べたという点である。貴族の姫、御所勤めの女房などから、人妻・尼・織女・農家の娘・炭焼の娘・商家の腰元・問屋の下女・さては遊女、乞食女などにいたるまで、貴賤上下、ありとあらゆる階層の、さまざま境遇・年令・氣質の女性たちである。これらを取り上げ描いている点に、彼の恋句の第一の特色がある。

次に、芭蕉の文芸における究極の立場について、彼の門人服部士芳は「三冊子」の中に、「師

の曰く、乾坤の変は風雅の種なりと言へり」と述べられている。乾坤の変とは、天地・自然・万物の変化、流転する相で、これが俳諧の種（素材）だということである。とすると、人間の愛欲・煩惱の諸相を写す恋の句も、つまりは乾坤の変の一つであり、女性が生まれ、盛りの年頃になり、さまざまの体験をしたあとで、やがて年を取り、老い衰えて死んで行く、それも変化・流転という点から見れば、花が咲き、木の葉が茂り、やがて散つてゆく、飛花落葉の無常の相と全く変わるところがない。そして、花や紅葉が美しければ美しいほど愛惜の情が深いように、女性が美しければ美しいほど、その衰亡に対する感慨も深いもので、その哀憐の情をさりげなく句にあらわすところが「しおり」なのである。「浮世の果は皆小町なり」という句は、女性すべてに対する深い同情と愛惜があふれ出た「しおり」の句であると言つてよい。そして、この溢れ出る哀憐の情によつて詠まれる恋句は、興味本位なおもしろ、おかしな心をもつて恋の諸相を詠んだ、あるいは恋の詞だけを集めて作られた貞門・談林時代の俳諧の恋句とは違つて、どのような卑俗な、あるいは好色的な素材を詠んだものであつても、その裏に深い感慨・観相がひそみ、「あわれ」・「しおり」が読む人の胸を打つのである。この「しおり」（おのずと滲み出る哀憐の情）が、芭蕉の恋句の第二の特色なのである。

のた打猪の帰る芋畑

路通

賤の子が待恋習ふ秋の風

芭蕉

山の猪が夜になると出て来て芋を喰いあらし畑にころげまわつては帰つて行く、そのような辺鄙な山里、過疎地帯に住む村娘の恋を、その生活環境に即して描いているが、彼女の恋人はなぜ現われなかつたか、それからその娘はどうなつたか、それらをいろいろ想像すれば、優に一篇の小説を書くことができるだろう。

あやにくに煩ふ妹が夕ながめ

越人

あの雲はたが泪つつむぞ

芭蕉

註釈書の多くは、この付合を源氏物語の夕顔のおもかげと見ている。芭蕉の恋句には、このように、源氏物語など、その他平安時代の物語のいろいろな人物・場面が取り入れられ、恋の描写・感情を複雑にしている、そこには平安朝物語文学の「艶」とか「物のあわれ」などが感じられる。

以上、二つの例を通して考察したところだけでも、芭蕉の恋句は、貴賤・上下、さまざまの時代・階層・境遇の「さまざまに品かはりたる恋」を素材として取りあげ、これを述べるもので、いわば、それは恋の諸相の叙事化であり、恋を物語化し、小説化したものと言つてよいであらう。

連歌・俳諧における恋句の源流は、大体新古今集の恋歌あたりにあるというのは、もともと百韻連歌の形式が定まつて来たのが、この平

安末から鎌倉初期のころと考えられるからそれは当然かも知れないが、それだけではなく、当時の歌人の影響もいろいろの面であらわれている。俊成の幽玄・定家の有心体、それらは正徹から心敬へ、心敬から芭蕉に伝わっている。たとえば定家の云う親句・疎句という考え方が、芭蕉では余情付、(句ひ、うつり、ひびき、位) となってあらわれたと私は考えている。

しかし、このように、平安末期の恋歌の伝統を取り入れて、「艶」の美を完成させた芭蕉の恋句も元禄三年あたりを頂点として、変化してゆく。それは「おくのほそ道」の旅の中で彼が考えた「軽み」という手法(日常の具象化を通じて人生を表出する手法)が、恋句の中にも浸透してくるからである。もちろん、「さまざまに品かはりたる恋」を取り上げて、その諸相を描くという基本的態度に変化はないけれども、今まで親しかった古典の世界・和歌の世界から離れ、今度は庶民の生活の中からさまざまな恋

## 連句はタンゴ アルゼンチン連句紀行 近藤蕉肝



### ●アルゼンチンへ!

八月十九日から三十日までの十二日間でアルゼンチンの四つの大学でセミナーをやって、スペイン語で十二調を四巻と三つ物一つ巻いて

を拾い上げようとする。俳諧は「新しみ」が生命で、俳諧師は常に「新しみ」を追求しなければならぬ。芭蕉が「軽み」を提唱したのも、この「新しみ」を求めてのことである。

ふすま掴んで洗ふ油手

掛け乞に恋のこゝろを持せばや

嵐蘭

芭蕉

上おきの干葉刻もうはの空

馬に出ぬ日は内で恋する

野波

芭蕉

このような晩年の彼の恋句は、題材・表現ともに、庶民の生活・用語をそのまま取り入れ、全く俗の世界であり、好色的な要素もある。これが「軽み」の世界の恋である。

その市井における「さまざまに品かはりたる恋」を取り上げながら、それを乾坤の変と見、飛花落葉と観する精神が背後に存在した。同じく、町家の腰元、宿屋の下女、それらの恋を描

きました。連句を巻くための講義もしましたが、

京都産業大学の井尻香代子教授の素晴らしい通訳のお蔭でセミナーの参加者の反応も良く、アルゼンチン連句協会を創りたいという話も出ました。アルゼンチン独立二百年に当る二〇一六年には、連句交流をやりたいという話まで出ました。二〇一六年はアルゼンチンに行きましよう。この場を借りてお誘い申し上げます。

出かける前に『猫蓑通信』に書くことを十項

きながら、談林俳諧が、「おかし・なぐさみ」と見たものを、蕉風俳諧では、「あわれ」・「しおり」(人間を哀憐をもって眺める心)の心をもつて眺めたのである。芭蕉は晩年、このことを「高悟帰俗」という言葉で表現している。

右の付合も表面的には、いかにも野卑・露骨である。しかし、芭蕉はこの野卑・露骨な恋を描くことによって、この馬子の全生活を描写し、そこにユーモア、「あわれ・しおり」をも感じさせているのである。

解題●以上二章は、『季刊連句』第三五号から転載の、東明雅先生の「恋句の作り方味わい方」前半です。恋句はまさに連句の基盤、連句の本質そのもの。「魅力的で新しい恋句をどう作るか」は、技術的な問題以前に、何より人間的な事象に向き合うにあたっての作者自身の「心」のありかたの問題だという、蕉風俳諧と猫蓑会連句の基本的な考え方がよくわかります。次号掲載予定の後半は、「三 現代恋句の作り方」「四 現代恋句の鑑賞」の二章。(斎)

目ほど考えて、原稿の原案を考えて来る予定でしたが、現実にはそんなに甘くありませんでした。現場には机上の空論を吹き飛ばす風が吹いていて、書くべきことが山ほどできました。

アルゼンチンの人には「連句はタンゴ」というスタンスで説くのが分かりやすいだろうと思うのですが、それが何と大当たりでした。一つ目の大学では、セミナーの終りのプレゼントにタンゴダンサーの置物を頂きました。

私の「連句はタンゴ」説を認めてくれた証拠です。四つの大学を回るにつれて、その仮説が正しかったことを確信しました。

実際にカルロス・コペロという一流のタンゴダンサーと会う機会もあって、ミロンガ（タンゴのダンスホール）にも案内してもらいました。そこでは目と目が合ったら立ちあがって、男が女を誘いに行きます。無言の歌壇です。二人は無言のまま抱き合って、男のリードでステップが始まります。そこが阿吽の呼吸で、これも連句の付合に似ています。タンゴの始まりは発句と脇句の付合に似ています。

### ●三密のコミュニケーションとタンゴ

密教では人間には身密・意密・口密の三密があるとされています。その秘密というのは、誰も隠している訳ではなく、存在は明々白白でありながらその実態が分からないことです。身は肉体、意は心、口は言葉です。それらの明白な存在を知らない人はいませんが、その真実はいまだに説明されています。われわれ連句人は口密については少しは知っている方だと思いますが、身密についてはほとんど知らないということも良いでしょう。走る・跳ぶ・投げるという単純なオリンピックの種目に関する身密でさえもよく分かりません。

三密はもともと一つのもですが、密教では説明の都合上分析的に三つに分けて説かれます。ところが鎌倉時代になると、それぞれが一つずつ説かれるようになりました。身密は道元

禅師の只管打座として、口密は法然上人の専修念仏や日蓮上人の唱題成仏として、意密は親鸞聖人の信心為本として、それぞれ展開されました。

秘密というのは、くどいようですが、例えば、人間には光そのものが見えないようなことです。光の本質は電磁波ですが、人間にはその一部の「可視光線」と呼ばれる閾しか感知できません。しかも光そのものが見えるわけではなくて、人間に見えるのは物に反射した光だけです。再び例えれば、プリズムで分光する以前の生のひかりそのものは見えません。光の秘密、この場合身密は、人間の視神経の能力の閾によって制限されています。もし人間に宇宙の電磁波のすべてが直接認知できる能力があったとしたら、大変な世界が顕現するのではないかと思います。

タンゴは複雑な男女の動きがボディランゲージだけで可能になる身密の世界です。男と

女がお互いの体を感じることが出来なければ、調和に到達できません。そこにはセックス以上に濃密な世界が想像されます。それは一種の芸術的なセックスの形と言っても良いでしょう。あるフランスの作家が、何故神は人間にこんな滑稽な格好をさせるのかと言ったそうですが、タンゴでは芸術的なスタイルでそれが出来るのです。タンゴダンサーはフランスの作家よりも文明的ではないでしょうか。

### ●三つの連歌発祥説

アルゼンチンへ行く前に私が連句はタンゴだと思ったのは、連句（連歌）の発祥についてのイザナギ・イザナミ説からヒントを得たからでした。二条良基は『筑波問答』に連句のルーツを三つ挙げています。最初の二つは『古事記』から、三つ目は『万葉集』から来ています。

一つ目は伊弉諾尊と伊弉冉尊が「みとの婿合」において詠み交わした歌が連句のルーツだ



アルゼンチンのタンゴ界の重鎮、ドン・カルロス・コペロ氏の娘さんのミリアム・コペロさんと踊る筆者。撮影はコペロ氏

という説です。二柱の神は高天原からオノゴロ島に降りてきて、天の御柱をめぐりながら、詳細は省きますが、伊弉諾尊が「あなにやしえをとめを」（ああうれしい、美しい乙女を）と言いい、伊弉冉尊が「あなにやしえをとめを」（ああうれしい、美しい男を）と詠み合い、その後あうれしい、美しい男を）と詠み合い、その後で女の「成り合はざる処」に男の「成り余れる処」を刺し塞ぎます。それが「みとの媾合」と言われる国生みの儀式です。その儀式によって、現在日本と呼ばれる国が生まれたとされています。つまりイザナギ・イザナミ説というのは、日本誕生の儀式で詠み交わされた歌が連句のルーツだという説です。

二つ目は、日本武尊と御火焼の老人の酒折における片歌のやりとり（片歌二つを合わせて旋頭歌になる）を連句のルーツとする説です。北方の遠征からの帰りに甲府の酒折まで来たところで、日本武尊が片歌の形式で問いかけます。

新治 筑波を過ぎて 幾夜か寝つる

即ち、「新治・筑波を過ぎてからここまで幾晩寝た（何日経った）であろうか」。これは問いかけてですから、これを完結する下の句を誰かが続けることが期待されています。そこで火を焚く役の人々が、次のように続けます。

かがなべて 夜には九夜 日には十日を

即ち、「日数を重ねまして 九泊十日になり

ます」と答えました。日本武尊は老人の歌をたいそう褒めて、彼を東の国造（東国の地方官）にしました。歌が上手いということが出世に繋がったりすることがあったということです。いづれにせよ、この日本武尊の歌から、連句（連歌）を「筑波の道」と言うようになりました。

三つ目は、大伴家持と尼君の短連歌で、『万葉集』第八巻、一六三五にあり、尼君が上の句を詠み、それに家持が下の句を付けたものです。佐保川の水を塞ぎ上げて植えし田を刈る早飯は独りなるべし

佐保川は平城京を流れていた川ですが、そこに堰を作って田に水を引いていたことが分かります。付句の「独り」は「樋取り」が掛けてあります。つまり、堰を作って樋で水を引き込みました。早稲は台風の前には稲刈りが出来るように改良されたものでした。かつて大和盆地は百万の人口を養う程の生産力があつたと言われています。豊饒な水田風景が想像されます。この連句は短歌の上の句に下の句を連ねる短連歌の形式で、現在の連句形式の最も古い例です。そのために多くの研究者はこれをもって連句のルーツとする説を取っています。

### ●みとの媾合とタンゴ

さて、イザナギ・イザナミ説に戻りますが、「まぐわい」という言葉は「目合」と書いて、「目を見合わせて愛情を通わせること」と「男女が

契りを結ぶこと」の二つの意味があります。実はこの二柱の神は兄妹という設定になっていて、二人が初めて会う場面は記述されていませんが、兄妹なのでそこからそれまで全く知らなかったということは考えられません。しかし二人に国を創るミッションが与えられた時、それが夫婦としての共同作業であることの自覚が初めて芽生えたと考えることは許されるでしょう。天の御柱に降りてきた時、お互いに体の構造を尋ねます。イザナギが聞くとイザナミが、「我が身は、成り成りて成り合はざる処一処あり」と答えます。イザナミが聞くとイザナギが「我が身は、成り成りて成り合はざる処一処あり」と答えます。こうしてお互いにおソソとチンポがあることと、合体の仕方とを確認したうえで、天の御柱を「あなたは右回り、私は左回り」と申し合わせて、廻り合った後に歌を詠み合います。この時二人は歌を詠む前に目を合わせず、二人の目にはこれから共同作業を行う意志が表れてはいたはず。つまり、目と目が合つて、歌を詠み合つて、合体するところまでがセットで「媾合」なのでしょう。言い換えると、意・口・身の三位一体の行為が「媾合」なのです。目が合うという行為でその全体が代表されているのです。

歌を詠む順番は、『古事記』の説くところでは、詳細は省きますが、男が先が正しいとされています。タンゴでもリードするのは男です。この点もよく似ています。肩や背中や胸や腰に廻した男の手や指先から、そして忘れてならないの

は、強く握り合ったもう一方の手から、相手の女性だけに分かるような信号が発せられるらしいのです。それがどういう信号なのかは、今回の調査では未確認です。私にとつてこの身密の領域に潜入するのは、分光器によって七色に分かれる前の光そのものの世界に入るような困難なことのように思われます。案ずるより産むが易しと思われる向きは、タンゴ学校に入つて自らその技を習得されることを勧めます。いずれ誰かにやつてもらいたい研究です。

### ●更に古いルーツの可能性

また予想しなかった収穫もありました。今回のセミナーの手配をしてくれたアルゼンチンの東西財団所長であるステラ・マリス・クーニャ教授が「パジャードとコープラ」という主題で講義に加わってくれました。民族の伝統文化として伝わる二つの芸能形式が何と歌垣によく似ていて、しかもタンゴの遠いルーツの一つだといふので驚きました。つまり、先住民とヨーロッパ移民の詩と音楽とダンスが、複雑な生成過程の歴史を経て、現在の形になっているらしいのです。単純な太鼓のリズムに合わせて即興の詩が紡ぎだされます。二人一組で言葉による戦いを展開して、ラリーが続けられ、続けられなくなったら負けです。勝敗があるのは現在の連句と違ふところですが、歌垣の時代には異性を口説き落とせるかどうか勝負で、当然競合する敵もいたはず。パジャードとコープラの研究は、アジアと南

アメリカの二つの民族文化に共通のDNAがあるかもしれないという、比較研究の扉を開くかもしれません。このような視点から見ると、二条良基が提示した連句の三つのルーツは、それぞれ歴史的な発展の相を表していると解釈することも許されるのではないかと思われます。即ち、イザナギ・イザナミ説は歌の形式が定まっていなかった時代の連句（あるいは歌垣）の相、日本武尊説は旋頭歌による連句の時代、そして家持の時代になって現代と同じ韻律形式が確立されたということになります。

### ●ビナス・パワーとしての連句

イザナギ・イザナミ説に触れたついでに申しますと、この説は明治になって文献学的方法が一般的になって以後、急に言及されなくなりました。『万葉集』の大家家持と尼君の説を引く学者がほとんどです。日本武尊説は「筑波の道」という言葉の説明としてかろうじて生きています。国際連句の研究をしている私としては、五七五・七七音形式のみを連句のルーツとする説にいささか違和感を覚えます。外国語で書けば五七五・七七音の定形でなくても連句はできます。その定形はたまたま日本語の場合にあてはまるだけであつて、連句を人類普遍の文化遺産という立場から見るとき、何ら普遍性のない要素です。言語形式よりも付合の原理にこそ連句の普遍的な本質があると思われまふ。イザナギ・イザナミ説の最も重要なポイントは、「みとの媾合」が国生みの儀式であることです。そ

こには、軍事力によらず愛の力によって国を創るといふ精神があります。連句は人類普遍のこの精神を文学形式としたものなのです。

言葉は、テキストの意味だけに止まらず、常に行爲の側面を持つています。人は言葉で爲し、相手の行爲を引き出します。歌垣行動における歌のやりとりは、男女の一生を決める可能性を含んでいます。それを連句のビナス・パワー（愛の力）と呼びます。連句が文芸作品の完成を目標とするようになった現代でも、この連句のDNAは生きていると言えるでしょう。

ビナス・パワーはハプスブルグ帝国を作つた原動力でした。ハプスブルグ家は婚姻関係によつて領土を拡大しました。王は各地方の言葉や文化に精通し、言語や文化を越えた相互理解を促進しました。神はハプスブルグ家にはビナス・パワーを授け、他の王家にはマルス・パワー（軍事力）を授けたと言われています。連句にもビナス・パワーがあります。二条良基が戦争によらずに南北朝を統一して、朝廷存続の危機を救うと同時に室町時代の平和を作り出したのは、連歌の力によるものでした。軍事力によつて乱れている現代の世界において、連句の存在意義（レゾン・デートル）としてこのことを強調したいと思ひます。

成蹊大学名誉教授  
日本連句協会常任理事  
二〇一四年九月十五日



●第二十四回猫蓑同人会総会が開催されました  
 六月十五日（日曜日）、新宿ワシントンホテル新館三階にて、第二十四回猫蓑同人会総会が開催されました。十一時からの議事後、八卓に分かれて歌仙を興行しました。当日巻かれた歌仙八巻のうち四巻はすでに前号に掲載しています。残り四巻は今号のP6、7に掲載しています（既報）。

●第三百三十回例会（猫蓑会総会）が開催されました  
 七月十六日（水曜日）、江東区芭蕉記念館にて、第三百三十回例会（平成二十六年猫蓑会総会）が開催されました。十一時より総会議事が行われ、正午より八卓に分かれて歌仙の実作を行いました。当日の歌仙八巻は今号のP2～5に掲載しています。



実作会二階和室席の様子

当日は、新庄北陽社より、結社休会にあたってご寄贈いただいた「百福」の印章の掛軸（「福」の字の印章百種を押し、軸装したもの）と、それに伴う北陽社主井上玲虹丈による句額が会員に披露されました。また、根津忠史丈により、先師根津芦丈翁の米寿記念自筆扇面が披露されました。会員の佐藤徹心丈による日本画と書（武井雅子丈捌の歌仙）の融合作品も披露されました。



新庄北陽社よりご寄贈いただいた「百福」の軸



芦丈翁米寿の自筆扇面「雪一夜太陽の垢洗はれて 米寿芦丈」

●今後の予定

●第三百三十一回例会

芭蕉忌正式俳諧興行・明雅忌協起源心実作  
 十月十五日（水曜日） 於・江東区芭蕉記念館

●第三百三十二回例会

平成二十七年初懐紙・歌仙実作  
 一月十八日（日曜日）

於・新宿ワシントンホテル新館四階

●第三百三十三回例会

藤祭正式俳諧興行・二十韻実作  
 四月二十五日頃 於・亀戸天神社

●第二十五回猫蓑同人会総会

六月二十一日（日曜日）  
 於 新宿ワシントンホテル新館三階

●猫蓑基金にご協力ありがとうございます

・繁原敏女様 平成二十六年七月 二千五百円  
 ・篠原達子様 平成二十六年七月 一万円

基金口座 みずほ銀行新宿新都心支店

猫蓑基金 普通預金 3376045

●新会員

・山城一子 二十六年八月入会

●バックナンバー

・『猫蓑作品集』バックナンバーご希望の方は鈴木千恵子まで。

・『猫蓑通信』バックナンバーは、創刊号以下すべて猫蓑会オフィシャルサイトで閲覧、ダウンロードできます。

<http://www.neko-mino.org>

季刊 『猫蓑通信』第九十七号

平成二十六年十月十五日発行

猫蓑会刊

発行人 青木秀樹

〒182-0003

東京都調布市若葉町2-21-16

編集人 鈴木了斎

印刷所 印刷クリエイト株式会社

